

記者証のことはやはり気になった。あれだけ警察が報道陣の規制と管理に当たるようになったのだから、一九八六年の「ワーキング・プレス」パスでは、この先何か問題を引き起こすかもしれない。昨日、グリニッチ・ストリートにいた外国報道関係者は、全員、写真入りの黄色い記者証を首から下げていた。「テンポラリー」と大きく記されたニューヨーク市警発行の臨時記者証である。テレビ局の日本人スタッフに訊いてみると、ニューヨーク市警本部であるワン・ポリス・プラザへ行って申請すれば、その場で発行してくれるという。

わたしは必要な写真と申請書類が揃ったので出かけることにした。事件の十一日くらい閉鎖されていた証券取引所が今朝から再開されたので、まず、ウォール街を見てから市警本部へ足を伸ばしてみよう。市警本部はブルックリン橋のたもとにあるので、ウォール街から歩いて行かれる距離だった。

ブロードウェイに出てみると、たくさんの通勤者が歩いていた。キャナル・ストリートの閉鎖ラインは、変わらずバリケードで通行止めになっているが、勤務先の証明書をもつ人は検問を越えてオフィスまで歩いて行かれる。アパートを出ると9時15分、ニューヨーク証券取引所はもうすぐオープンする。あの日のように晴れ渡った空が高く広がる。

チェンバース・ストリート近くまで歩いてくると、それ以降の警備は嚴重な様子。

「ウォール街へ行くには、どうしたらいちばんいいですか？」

通りの警官に尋ねてみた。知らないと言を振る警官ばかり。郊外から駆けつけた警官はニューヨークの地図など何も知らない。

「オーケー、そこを左に曲がって、地下鉄のブルックリン橋駅があるから、Mラインに乗ってふたつ目のブロード・ストリート駅で降りれば目の前だ」

ニューヨーク市警のバッジをつける若い警官が丁寧に教えてくれた。

ブロード・ストリート駅に降りるとプラットフォームに足がついた途端、煙が立ち込め強烈な匂いが鼻を襲ってきた。プラスチックが焼けて有毒物資の匂いが入ったあの匂い。改札には誰もいなかったが、出口には数名の州兵が機関銃をもって警備に当たっていた。ここやかに一九八六年発行のパスを見せ、無事通過。ほっとした。

地上に出ると「フェデラル・ホール」のすぐ前、ウォール街とブロード・ストリートの角に出た。左手のニューヨーク証券取引所には、巨大な星条旗がクイン・アン・スタイルと呼ばれる正面の壁一面を覆っている。今では国立博物館になった「フェデラル・ホール」の前ではジョージ・ワシントンの銅像を背景にABC放送が生中継していた。匂いが酷いので迷彩服を着た州兵のなかには、ガス

マスクをつけて警備している兵士もいる。グラウンドゼロはここから五ブロックほど先、これほど煙が立ち込め匂いが酷いのに、ジュリアーニ市長は強引に取引所を開けて、米国金融市場は健在なりと示したかったに違いない。遅れて出勤したトレーダーが、ニューヨーク市警の固い警備の前で取引所のなかに入るのに手間取っている。

証券取引所を通り過ぎた先の検問では、報道陣がバリケードの向こう側から写真を撮っていた。一度ここを出てしまえば戻れないことはわかっていたが、匂いが酷いので退出することにした。ブロードウェイに出てまっすぐ北を指そうとしたが、通してくれない。その地域で働く人だけに限定されている。仕方がないので、回り道をしようにしているうちに迷ってしまった。十九世紀の面影を残すこの辺りは、細い道が入り組んでいて実にわかりにくい。マスクも持つて来なかったのも、次第に気分が悪くなってきた。グラウンドゼロの救急隊はもつともつと酷い異臭のなかで働いているんだ、と自分に言い聞かせてみるが、体は新鮮な空気を求めている。あともう少しの辛抱と思つて我慢しているうち、やつとパール・ストリートに出て一息ついた。

ワン・ポリス・プラザにたどり着くと、ニューヨーク市警本部の裏口には五十名くらいの報道陣が列を作っていた。二時間ほど待たされ、ようやく九月二十七日まで有効な黄色い臨時記者証を手にしたが、果たしてこれがどれくらい役立つだろうか。一九八六年発行の「ワーキング・プレス」パスは取り上げられてしまった。ニューズウィーク日本版で働いていた時の良い記念だったのに……。

アパートに戻ってテレビをつけると、取引を開始した朝9時30分に九六〇〇ドルから始まったダウ工業平均株価は急落、10時過ぎに九〇〇〇ドルを割り込み、午後4時には八九二〇ドル七〇セントの終値をつけた。夕方になると隣のトレーダー、トミーも勤めから帰ってきた。

*トミーの話

「あの朝、8時15分に出勤してコンピュータの電源を入れ、取引に目を通してから、テレビを見ていた。ぼくが働くのは小さな投資会社で、社員は五十人ほど。最近、北タワーの八十三階に移ったばかりだった。

8時48分、突然、雷のような低い深い轟音とともに建物がもの凄く揺れた。タワーが地面に倒れるかと思った。窓の外を見ると、まっ黒な煙が飛んでいた。みんな立ったまま呆然として、どうしたらいいかわからない。……何だか以前に全く同じ体験をしたことがあるぞ、まるでデジャブみたいだ、と思った。一九九三年の（爆破事件）時、ぼくはこのビルの人階にいたから、あの時のことを思い出していた。非常階段を下りなくてはいけない、ととっさに思った。

オフィスの入り口扉を開けると、焼け焦げた顔が飛び込んできた。火傷したのはどこかのトレーダーで、エレベーター・ホールかトイレで閃光に当たったのだろう。手も焼けただれ、体は淡いピンク色。ぼくらのオフィスは閃光を受けなかった。何故だかわからない。ホールの煙が凄かったので、すぐに扉を閉めた。この人に濡れたタオルをあげて応急処置をしたりしながら、緊急時の指示を待っていたんだ。でも、誰もなんとも言って来ない。六、七分してコンピューター専門家のアルジェリア人が、

「いま、すぐ、出て行かなくてはいけない！」

とみんなに言い渡した。彼は扉を開けて何か見たようだった。恐らくホールが大きく破壊されているのを見て、危険を察知したのだろう。

そこでみんな彼の後を追った。誰もエレベーターを使おうとはしなかった。非常階段には煙が立ち込めていたが、まだ前が見えるくらいで、そんなに酷くなかった。非常階段は三つあったと思う。誰かが火傷した人を助けて、みんなで行った。出来るだけ早く走り下りた。十五階から二十階分を下りると、下へ向かう人が階段にいつぱいで身動きが取れなくなった。その階でフロアに戻り空室のオフィスを通り抜け、別の階段を見つけ、十階くらい下りた。

その階段でもまた人の壁に突き当たった。それ以上は何もできない。みんな冷静だった。煙が酷いので、ぼくはシャツを通して息をしていた。深く息をしないようにとかいろいろ考えた。数分待つて下の階へ下り、また数分待つて下の階という感じ。とても時間がかかった。脇から階段の下を覗くと人びとの腕がずっとずっと下の階まで続いている。少しも動かない。あと何十階あるんだろう。とても怖かった。ぼくは震えていたけれど、みんなとても冷静だった。時々、下りるのがとても遅い人がいた。ぼくはそつとすり抜けた。でも押したりはしない。人びとはソーダを回し飲みしたりして我慢強く待った。

誰も二機目の飛行機が南タワーにも突っ込んだことを知らなかった。もし、誰かが知っていたら、みんなパニックに陥っただろう……」

トミーは一気に喋り、ここで大きく息をした。わたしはテロだとは思わなかったかどうか訊いてみた。

「飛行機が上の階にぶつかつたと誰かが言っていた。何故、飛行機がビルにぶつかるのか……説明がつかない。多分、テロだろうと思った。どれだけ大きな飛行機かということは誰も知らなかった。ちょうど、その頃、消防士が十五人から二十人、階段を上がってきてすれちがった。熱くて煙が酷いから、消防士もたいへんだった。酸素ボンベやはしごや斧まで持ってきている。それにあの消防服だから、一步上るのも難儀だった。一步上って大きな息をついて、また一步という感じだ。ひとりが「三十一階のバックドアにいるって次の消防士に伝えてくれ」と言い残していた。後続部隊と落ち合う場所だ。彼らを見てほつとした。消防士は

通気孔を開けて空気を取り入れてくれた。

あれは窓の開かないビルなんだ。酷いデザインのビルで、非常階段も二人通るのがやっとというほど。それに火事用のドリルなんてなかった。時たま非常ベルを鳴らすくらいだ。一カ月前、四十五階から八十三階に移った時には、嫌な気分だったよ。そう、同じ北タワーで上階へ引越した。心配だったから、オフィス・マネージャーに煙用のマスクでも買ったらどうかって提案してたんだ。でも、人間って慣れてしまうものだね。投資会社のカンター・フィッツジェラルドの社員ともよく顔を合わせたものさ。コンサーバティブなスーツを着込んだクールな感じのビジネスマンばかり。彼らの多くは戻らなかったなあ……。

そういうえば、あの朝、出社する時に盲導犬を連れた人に出会ったんだ。その人も犬と一緒に階段を下りている姿をどこかで見かけたね。

とにかく消防士が上ってくる。実際、それで下りるのにもっと時間がかかった。狭い階段だから消防士が上ってくると、それだけ遅くなる。ぼくはもうひとつ心配があった。うちの子供がふたりともすぐ近くの公立学校PS二三四へ行っている。トレード・センターからたつた四ブロック北。

「飛行機がタワーのどこにぶつかったか知っていますか」

と聞いてまわっていた。飛行機がタワーに呑み込まれたことは知らなかったから、飛行機はタワーにぶつかって、小学校に落ちたんじゃないかと心配したんだ。

最後の十五階分は人が少なくなったので、走り下りた。スプリンクラーが作動して、階段が水びたしだったけど、構わずどんどん下りた。一階に下り着いたのは、午前10時頃だったと思う。八十三階から下りて来るのに、一時間十五分かかった」

* 「ぼくは大丈夫だ！」

「メイン・レベルへ着いてみると、エレベーターのドアはすべて破壊され、何もかもメチャクチャ、まるで災害地域のようなだった。被害は上階の方だけと思うかもしれないけれど、タワーが崩壊する以前に、一階の被害も凄いものだった。スプリンクラーが作動して水浸し、ガラスやら何やら瓦礫が至るところに転がっていた。爆風はエレベーターを伝って下降し、一階でまた爆発したに違いない。一階の中央ホールも瓦礫でいっぱいだった。書店の『ボーダーズ』の方から出るように、誰かが大声で指示していた。ぼくはもう安全だと思って家に電話しようとしていた。すると大声で、

「今すぐ出て行け！」

と誰かが怒鳴った。

そこで言われた通り表へ出て、チャーチ・ストリートを走った。一ブロック半くらいところで振り返ると、南タワーが崩れ落ちるところだった。巨大な煙と残骸がぼくに向かって押し寄せてくる。みんな叫び声を上げて走っていた。ぼくも全速力で走った。巨大な煙と瓦礫はすぐ後ろから追いかけてきて、まるでその端をサーフィンしているみたいだった。ぼくが逃げるとすぐ追ってくる。ワイルドだったね。後ろを振り返ると、上階の爆発で噴出した煙が地面まで届いたところだった。

やっと公衆電話がみつかつて家に電話した。息子が出てきたのですごくハッピーだった。

「ぼくは大丈夫だ！　すぐうちへ帰る」

とだけ伝えた。家までほんの五ブロックだったので、歩いて帰ってきた」

こうして帰宅したトミーに、わたしは入り口でぼったり出くわしたのである。彼はわたしに会ったことを全く覚えていなかった。わたしの記憶では、リンダと子供たちはすでに北へ向かって避難していると思っていた。そう言うトミーは首を振り、いや、四階まで上がってロフトで家族に会ったのだ、と語った。

「あの朝、うちのワイフは校庭で下の子供を遊ばせていた。大きな飛行機が飛んできて、ぼくのいる北タワーにぶつかるのを目撃したんだ。九歳になる息子は、教室で授業を受けていた。教室の窓がちょうど南向きなので、息子も飛行機がぼくのいるタワーにぶつかり爆発するのを見ていた。ワイフはすぐ教室に飛んできて息子の手を取ると家へ帰ってきた」

リンダが子供を連れて帰ってきた時、ピートとわたしは現場へ出かけるところだった。後で振り返った時、リンダはずいぶん早く学校へ駆けつけて子供を連れ帰ったものだと思うが、彼女自身が学校にいたと聞いて納得がいった。

「息子は、ぼくが電話してきたよとワイフに話したが、彼女は息子の言葉を信じなかった。リンダはぼくがもう死んだものとはかり思っていた。でも、すぐにぼくはドアを開けて立っていたのさ。」

「ここは安全ではない。北へ避難しよう」

そういうなり、ぼくは家族を連れてブロードウェイを北へ向かった。ソーホーで後ろを振り返って見ると、ぼくのいたビル、アンテナのある北タワーが崩れ落ちていくところだった。巨大な煙を上げてどんどん落ちて行く。その時、初めて、ぼくはワールド・トレード・センターがもうすっかり無くなったことに気付いたんだ」

トミーと家族は二十三丁目まで歩き、友達の家を訪ねた。そこに着いて初めて、神に感謝、生き延びた、生き延びたんだ、そう実感できるようになった。彼らはその晩、知り合いのアパートに泊めてもらい、次の朝にはシェルター・アイランドにある週末の家に向かったという。

いちばん怖い思いをしたのはどの瞬間だったかとわたしは聞いてみた。

「あの朝、飛行機がぶつかつた時だ。ビルが揺れていたあの数分間、本当にタワーが地面に倒れると思つた。それからすべてはもの凄く早く進行した。どの瞬間も恐怖でいっぱいだったけど……」

家に着いてリンダに会つた時には、何と言つたか覚えていないという。週末の家で休んでいる間には、また働きに出るかどうかわからなかつたし、これからどうするのか考えもしなかつた。五日後、マンハッタンへ帰つてくるのは少し緊張したという。家族もみんな緊張していた。しかし、帰宅してみると、すべてが元通りなのでほつとした。現場近くで避難した人たちは、ホテル住まいをしたり、誰かの家に居候しているから、ロフトに被害がなかつたことは本当に幸運だったよ、とうなずいた。

オフィスはすでに五十七丁目の新しいビルに移されたという。今日はそこに出社した。子供たちはPS二三四がまだ閉鎖されているので、グリニッチ・ヴィレッジの小学校にしばらく通うことになり、今日から通学している。

朝8時48分、北タワーに突っ込んだアメリカン航空一一便は、九十六階から百三階あたりに激突して内部で爆発した。南タワーに向かつたユナイテッド航空一七五便は、八十七階から九十四階あたりに突っ込んだ。アメリカン航空一一便は、ユナイテッド航空一七五便より上階に突っ込み、爆発も南タワーより大きくなかつたせいだろう、崩壊までに一時間四十五分を数えた。トミーは地上に下りてくるのに一時間十五分かかつたと言っているから、彼がもし南タワーにいたら……南タワーが崩壊するまでの時間はたつた五十二分、彼は恐らく助からなかつただろう。

扉の外で出会つた時、トミーはまるで家に帰つたことが信じられない、とでもいうような顔つきだった。アメリカン航空一一便は、あの凶悪な顔写真のモハメド・アタが操縦していたといわれる。モハメド・アタがもう少し下の階に向かつてジェット機を全速力で突進させていたら……もう止めよう。トミーは生還し、子供たちもみんな無事だったのだから。